

小浜善信先生を送る言葉

著者	山之内 克子
雑誌名	神戸外大論叢
巻	64
号	3
ページ	1-4
発行年	2014-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00001656/



小浜善信先生を送る言葉

山之内 克 子

小浜善信先生は、1975年に京都大学大学院文学研究科西洋哲学史専攻博士課程を修了され、京都大学文学部研修員を経て、1977年4月、講師として神戸市外国語大学に赴任された。その後、2013年3月に定年退職を迎えられるまで、哲学、比較思想論、西洋哲学史、哲学特殊講義など、西洋哲学および思想史に関する広い領域の科目を担当され、主として外国語を専攻する本学の学生たちに、哲学、思想史についての知見を開くため、かぎりない貢献をしてこられた。

小浜先生の本来の専攻領域は、アウグスティヌス、トマス・アクィナスをはじめとする西洋哲学で、この分野ではすでに早くからめざましい業績を発表してこられた。だが、先生の哲学研究における指針は、「哲学の営みは哲学者を離れてはあり得ない」という視点にあり、1980年前後からは、このような地平に立ちながら、西洋哲学の既存の枠組を大きく踏み越えて、日欧の哲学の比較研究を積極的に手がけられるようになった。とりわけ、九鬼周造、西田幾多郎をあつかった一連の研究における鋭い切り口と緻密なアプローチは、哲学・思想関係の諸学会において、きわめて高い評価を得ることになった。

このようにしてじっくりと深められた日欧哲学比較は、2006年、著書『九鬼周造の哲学—漂泊の魂』（昭和堂）において、ひとつの集大成をみた。九鬼哲学のなかに「東西思想の接点」を求めながら、九鬼周造がその生涯をかけて取り組んだ「人間存在とは何か」「『わたし』はなぜここに存在するのか」という問題をユニークな視点から論じた本著は、出版後たちまち評判となり、学会誌においてさかんに書評されたばかりでなく、「神戸新聞」をはじめ、一般のメディアにも大きく取りあげられ、話題を呼んだ。2009年には早くも北京にて、郭永恩、範麗燕両氏による中国語版が出版されたことは、アジアにおける九鬼哲学への強い関心とともに、本書にたいする評価の高さを裏付けているといえるだろう。その後今日にいたるまで、この著書は、九鬼周造研究のスタンダード・ワークとして、多くの論文、著作で言及・引用されている。

こうした研究活動とともに、小浜先生は学外においても、母校の京都大学で長年教鞭を執られたほか、京大中世哲学研究会、中世哲学会、新プラトン主義協会など、数多くの学会、研究会の委員、編集委員を務められ、本学教授を辞されたのちも、引き続きわが国の哲学、思想史研究をリードする役割を担って

おられる。

*

1999年4月、私がドイツ語・ヨーロッパ文化論の新規採用教員として本学に赴任したときには、小浜先生はすでに勤続22年を迎えようとする大ベテラン教授であった。哲学・思想史学界におけるいわば「大御所」的な存在であったにもかかわらず、先生は私たち新任教員にもいつも気さくに声をかけてくれた。とりわけ私が着任して以来、ドイツ語をめぐる人事がめまぐるしく動いた時期もあったが、そのような「非常事態」に際しては、ご多忙なスケジュールを抱えていても、とにかく時間を割いて親身に相談に乗ってくださった。外国語大学のあり方についても心中に明確なビジョンと高い理想を抱いておられ、私たち総合文化の教員からすれば、本当に心から頼れる大先輩であった。

また、ご自身が第一級の研究者という立場から、何より、若手の教員が研究成果を外向けに発信することをたいへんに喜んでおられた。哲学と歴史という違いはあったものの、同じ西洋研究に取り組んでいるご縁から、ことあるごとに拙い研究業績をご高覧いただいていたが、そのたびに心強い励ましの言葉をかけてくださった。ヨーロッパ社会文化史を専攻しながら、私は一時、本来の研究テーマから少々離れて、音楽を主題とする大著の翻訳に没頭していたことがあった。作業がいよいよ佳境に入ろうとしていたとき、学内で偶然出あった小浜先生が、ふと、「翻訳家になってしまわないように」とおっしゃられたのである。ごく短い立ち話ではあったが、研究者としてのキャリアを積むに連れ、おのずと拡大していく「仕事」の領域のなかで、どのようにバランスをとっていくか、非常に意義深い助言をいただいたことを、いまでも鮮明に記憶している。

2005年以降、小浜先生とたいへん親しく交流のあった木村榮一先生が学長を務められた期間には、時おり小浜先生に誘われて、学長室でコーヒーを囲んでともに歓談するような機会にも恵まれた。木村学長のもとで、外大が、独立法人化をはじめ、これまでに例をみないようなさまざまな改組を体験したことは、ここであらためて指摘するまでもない。木村学長が、大学が最善のかたちでその改革プロセスを切り抜けられるよう、懸命に心を砕いておられたことも、周知のとおりである。学長室での気安い談論の折にも、独法化やその後の中期計画に話題がおよぶこともしばしばであった。そんなとき、木村先生が何度も繰り返して口にされた、「サンショウウオ」の比喻を、私はいまだに忘れることができない。大学はいま、未曾有の転換期に立たされている。深刻な少子化問題もあり、経営は今後ますます厳しくなるだろう。しかし、その激変期のなかにあってもなお、「小浜（先生）のようなサンショウウオみたいなヤツ

(ママ) がしっかり研究できる環境を守ることこそ、大学としての義務や」と、木村先生は笑いながらいつも力説されたのであった。サンショウウオは、水のきれいなところでしか生きられない。清水を湛えた溪流の水底で、さして派手な動きをすることもなく、じっと長い寿命を全うする。木村学長らしい毒舌を含んだこの表現のなかには、年を追うごとにますます、外向きに人目を惹いてアピールする単発的な活動が大学に求められる一方で、小浜先生のような、じっくりと本格的な研究を重ね、日々の仕事の礎石をもとに大著を完成させるタイプの研究者を、今後も大切にバックアップしていきたいという、強い念願が込められていたのだと思う。その後、木村先生が大学を去られてのちも、雑務に忙殺される日常のなかでふと、研究者としての理想を思うとき、小浜先生による学者としてまさに規範というほかない膨大な業績と、木村先生が冗談交じりに口にされた「サンショウウオ」の喩えが、つねに脳裏をよぎるのである。

その小浜先生もまた、この3月に定年を迎えられ、外大をあとにされることになった。われわれ同僚にとって、このような立派な先輩を送り出さなければならないことは、じつにさびしい限りである。大学をめぐる状況には相変わらずさほど改善の兆しはみえないが、しかし、こうした殺伐とした世界を去られた先生はこれから、より清らかな水の流れる場所で、日本の哲学、思想研究を主導するような素晴らしいお仕事を続けられるにちがいない。先生には、ぜひ健康に留意なされ、いつまでもお元気で、そして、研究者としてのさまざまな活動を通じて、今後も私たち後輩に範を示し続けてくださることを心よりお祈りし、送る言葉とさせていただきます。ありがとうございます。

